

説教 『深い闇と愛の光』  
 聖書 イザヤ書 53：7～8／マタイ福音書 27：38～44

十字架刑の直前、イエスはローマ兵から散々侮辱された(マタイ 27:28~30)。十字架につけられると、一般民衆に罵られ(27:39~40)、次に権威者たちに嘲弄され(27:41~43)、そしてしまいには傍らで共に処刑される者にも嘲笑される(27:44)。人間の漆黒、微かな光さえ無いなんという闇であるのか。

ローマ人はイスラエルの民を蔑むが、イエスはそれを受けた。信仰の権威者らは無知無学な民を莫迦にするが、イエスはそれを受けた。民衆は囚人に唾するが、イエスはそれを受けた。そして共に十字架にかけられた囚人は、侮辱された神の子をさらに侮辱し、イエスは彼らの呪いをも受けた。

「苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わぬ羊のように、彼は口を開かなかった(イザヤ 53:7)」。人としてガリラヤで暮らし「主の前に育った(53:2)」イエスは、神の預言のごとくに進んだ。しかしそれを知る者は、誰一人としてなかった。「このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった(マタイ 26:56)」。女たちのように弟子も十字架を遠望していたなら(27:55)、挫折感は倍増して彼らをいっそう痛めつけただろう。

「捕えられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか、わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から断たれたことを(イザヤ 53:8)。「民の背きのゆえに」イエスは十字架で処刑された。その民のすべてから侮辱され、肉体は激痛、そのただ中で忍苦し、イエスはひたすら沈黙していた。屠り場に引かれる「神の小羊」として(53:7)。

世のあらゆる者が十字架のイエスと対立している(マタイ 27:39~44)。「民の背き(罪)」は、こうした形で現れた。まさしく十字架において、私たちの罪と、神の御心が衝突している。イエスは、人間と父なる神の間であって引き裂かれたのだ。思い起こせば、ベツレヘムの家畜小屋に生まれ、踏みにじられた者たちと生き、徹底して世の低みを歩まれたイエス。そして最後は、すべての者に侮辱され、人と神に引き裂かれた。「私」を赦して引き裂かれ、神の恵みを自分では受けず「私」に与えて下さった。

最初の福音書マルコは「神の子イエス・キリストの福音の初め(マルコ 1:1)」と書き出すが、その結果が十字架だとは、「福音=よきおとずれ」の響きはどこへ行ってしまったのか。イエスの言葉や業には、場の空気を一転させる鮮やかさがあった。だが十字架の敗北、鉛を飲んだようなこの重苦しさはいったい何であろうか。教会の答えは決まっている。背後に復活という逆転劇が待ち構える筋書きだ。

十字架という問いに対して、すでに決まっている回答をなぞるようには語りたくない。なんだか安易で、なんだか八百長で、「さあ、次は復活の希望ですよ」と今は言いたくない。それよりも私たち一人ひとりが、自分の足で十字架の暗さに近づいてみたい。十字架の闇にあって、キリストの苦しみで輝く愛の光を、誠実に、痛みをもって我が身に受けたい。「私」のためのキリストが苦しまれていることを、頭で「分かる」のではなく、心身全体で受け取りたい。十字架こそが福音の源であり、人間を力強く支え導く命として輝く。私一人分だけでなく、隣人数名の足許をも照らしうる愛の光なのだ。



《おまけのひとつ》

十字架は真夜中の出来事 わずかな光にも感応してしまう 粗野と繊細が入り混じる出来事だった 焚火の光が 一人ひとりの貌に疲労と猜疑をくつきり彫りだし そして 柔らかく崩していく希望